

全傳 勇婦

繪本更科艸帑

初編

卷之三

遠
977
3



明遠 13
號 977
卷 3

本傳

晴信朝臣中央

勇婦繪本更科草帝卷之三

遠州小夜中山麓 粟杖亭鬼印述

相木森之助死刑に達話

信州の使相木森之助試りしは甲州へ来た

信公村上が神妙のふりまいと満足しり

使者とらつく饗食庭しりて森之助を引出せり

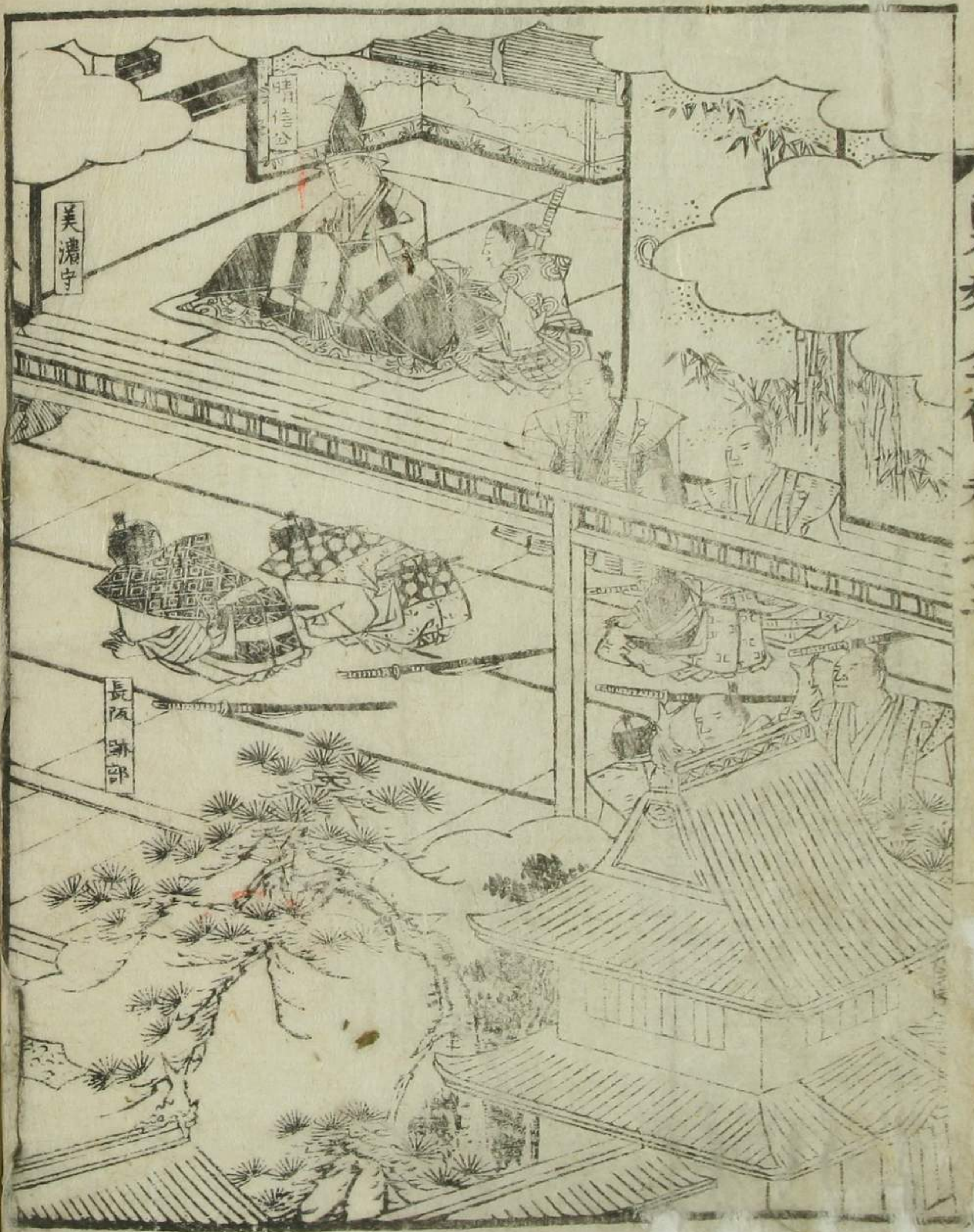
駿河守小幡原をけりめりて甲州の勇士列を執り

を並居り右のうまへ長坂跡部曲淵今井と

曠と居り人々此時相木森之助を廣瀬郷古門

三つへみ随へり引出し其骨柄きりて万夫不害の事

勇婦繪本更科草帝卷之三



と見えきり多敷きうらふ空上り列坐し馬場美濃守が顔と赤之助の顔色とまじり鏡面とくわく如くわれ諸人袖と引く是とち中々晴信公もうす赤之助と見きぬ其勇氣も人々を驚かし用いしうきひ子汝と見え殺さふまのびも助んうをかり入承ふつ二人やめ何れと宣へ赤之助うらむき辱き君の内淀よりとも叔父市郎兵衛君も降参仕るふり義清承をうき閉門同前より承り此度二君みつゝる心底更困籠りまう在りいふ此度罪と得るかくうらことうらへ早く首とる後せん

り我望其外よりういと其後ハく人々長坂跡部同ととろへ汝がやまぐもく承弟甥の敵うはいうぐゆるとる願くハ彼と兩人より下されいさうて新づい多き馬場美濃守最前より點しうらうりまがは前よりい其存る子細は何と森之助ははらづけ下され半伏し願ひ多し長坂頭とよりいれざる美濃守のう出る承亦兩人の祈ぐいやとて信州よりうらつてはるは其等一清鑓玉よりうらみはるは是れはうらうらと大に怒り多し晴信公もりくはるは長坂跡部が祈ぐいもさるうらうらかれ勇士を鑓

玉ふりぢり人さびへさうさび森之助も死をのぞむ
 心体是非なり此上ハ美濃守が宿所も切腹させよ
 太刀取ハ廣瀬々右エ門ヤ付ると宣へば長坂も返り
 ともさび切腹ともなまりぢりふれさうさび何とぞ
 我く小給りりさびぢりぢりぢりぢりぢり再三願
 いささき晴信公氣色ウツク多しいうさ兩人予が
 言附るさびとさびくいうさ条さうさへり目通り
 叶ハぬ早く立べいと以の外の内憤アふ兩人ハさうさ
 床前と立ちりさび晴信公ハ床お生さうさ四季咲
 の牡若と手よりら多し馬場美濃守よさうさ花
 も五月の頃ハ首蒲うさ似さうさ花も今初冬

の頃ハ只一輪さびのさうさ花もも々右エ門表之助
 か首とかくのさうさ扇とりさうさ牡若の花首と打
 けり美濃守おわさうさかきさうさ奉さうさ兩人と
 森之助と引立美濃守が屋鋪へ引つさ終ハ切腹と
 とげさセ々右エ門介錯とさうさ無慙さうさ
 更科夫の死骸と葬る並初子と失ふ話
 此時山本勘助板垣原のともがさうさ表之助がさうさ勇士と
 長坂跡部いりほさうさ美濃守一応も再応も君に
 助命と祈いり味方さうささうさ人さうさ慮さうさ
 やさうさ其日何者さうさ美濃守が門前
 落首と立ちりさうさ

塩尻と知りぬるこ
人成る場の

ひら

りこらやよ

さうと矢渡の

うら

是ハ森之助塩尻峠より

引渡されききばりさても

更科ハ信州の明をしき

とあひ出長光の刀と竹杖よ

まこそ夜ふまは是甲州うらま来

アけらにもや森之助ハ美濃守が幸



小頭らき今日切腹とききとらるる

もろしき馬場が中へへり

わいこへ森之助が女房更科とや

そのおけり何とぞ存生ハ對面

一言りゆたふゆら一目達せとびあへと

取次とりのみ移るいふ終ふも切腹相とと太刀

右エ門もえさるるゆらぬれ其趣とのふれ

ゆえいとさうり正体うきなげきか

とらうけりてせりて夫のふれとらりも一目

しの移るいふれハ美濃守心ゆら士

の若女房とゆらうへうれハ葬むるべ



更科塩尻山の
禁うて一子と産
様きつて
守らん

新編
御成
御成
御成



夏
如
全
伴
卷
之
三

ありしをに見たり 司トく子孫小乳をばりて更科ハ寐れ
 ぬやとどく寐く乳とらふるや人間ふりて後ハ
 銭とともせし仕方とされば米味噌など里へ出く調ひ
 きりてれば更科もよれ友と得し心こそ懐きし
 きつと淋しく木の實など拾ひてをりて友懐とらひ
 免く小児のとり返せしやとめやふ小児とせし
 遊しき或日更科焚物のやうざれが拾ひてんと山へ
 引たらしらふ大なる災を出来たり 此時長阪左門
 尉跡部大炊森之助とわりひの終り成敗せんものと思
 ひの外馬場が家より切腹仰付らるしよの本意なく
 かりしよ近頃森之助が女房此のやうにあり殊小男子

と出生しし由不の聞し是も敵の行しれせや此者
 どもと切殺ししうみはとんと聞合せしに塩尻
 山のふもとふらりてきて家来數十人召捕はたりし
 々々更科ハ見えぬ小児と懐もの遊ばし居る所へ
 ぐわくと押つけ長阪が長臣久保井兵次小児を見く
 面よ多しとふく誠や此婦人の勇猛しし中く手か
 合ふものふらびと聞ゆるふい此小憚と人質とさき
 ば手むくやの叶ふまどとはと入く小児とふい相ハ懐きも
 四方へ逃散けしかきものふらび更科ハ薪と履と糸
 柵へ歸きおとむいげり數十人の士家子とふつを
 中にも兵次大音上げ汝ハ相木森之助が女房よりへ

主人長阪左王門尉たゞ問へばきりたればやく屋
 舗へさへさへ一否と言は此小児芋ぢにさるごとく
 ぞ引ぬき胸をくさし付まじりも勇猛の婦人なれも
 亥子の人質より流みまじ侍をへるまどわらひを
 森之助が妻更科とやとのなりたつものさもはく
 屋しき入参さへ一其子にたすけむと詫なご何率し
 うぐい取らんと附れど兵次ハ八方小眼とくがり手むい
 せば突通さんとさる勢ひなれば左右も寄附まじ千こ
 おあはれをさくうら何国よかくまわり人猿四五足兵次
 う負へ搔付たれと思ひげざらぬなれば大狼唄るうら
 一疋のさけ小児とうぐいより何国もさく飛行る更科

を心のうちふやりやう是はほくら天の助なりと竹杖お
 仕込し長光抜くる一縦横無盡一切立まはす
 もの大勢志どほふりも逃出さる兵次怒るなり
 さうられ者も一人の婦人なりど手捕ませまといひ
 とりむむじんども組更科完おとらわらひ若後
 家と思ひた言ふ志むいと目よりさくさへ上
 傍ふりりる滝壺へごんぶとららこも亥子のゆき
 ろ流もくくく猶山ふくく心もさうらたづゆけは
 相木市郎兵衛が話
 爰に先年村上義清とくくみく信州と立退こいふ
 相木市郎兵衛とらり者らり強勇の聞えりて暗信

重く是をくらひきびくの戦場は高名の美名は
 りくハ一多教此ふい甥赤之助捕はきとてりて四州へ
 きしれども一言のりえついで出もなぐもつらびついで
 美濃守がやしたく切腹せしより久く對面へ
 刺すト家中あま相果しり不便とて功もへども降
 赤の身ハあつて魚よくくく多教あつるに市郎兵五が悴
 市之丞去年ト免多男子とり受けし市郎兵五
 初孫と見るとよほとびらとくくくら痘瘡とまげし
 身まわり多ればも勇猛の市良兵五るれども恩愛
 のかろしとふらかろしとやし森之助が事までも思ひつけ
 近ごつハ念佛者ととりて日毎ふたの寺法成寺へ

詣ちて多くくくハ孫が三七日るれば一入あつて弱く
 墓所へ詣り念珠はまがり回向する所よふしぎや山
 奥へ小児の泣声と市良兵五耳ととて立此山ハ信州
 おつぎく深林幽谷なり小児の泣あゑいふくしと声ふ
 ちくくいと多くと山奥へ歩行多れば溪のりくくく猿
 とも大勢一人の小児と鹿の脊ふのせ花などりせすは
 体たれば市良兵五つらり眼と配るふ人一人もぬし
 不審なれ糸ども赤孫のりとまりいざし枯木と丸木
 橋とくく溪とまがり猿の傍へらうよきバ猿ハ地をれて
 鹿もろとも小児とくくをて何地ともくく遊りくくくふ
 おつ小児いよくふ名はとくりに泣くくみど市良兵衛



相木市良兵衛山中



相木市良兵衛山中
 鹿の脊小
 一子とわらふ

相木市良兵衛山中

立ち寄り抱りげり見くらわれが顔色梵々び電面
重瞳威のりく武く見えたるは市良兵五よろこびり
たこも天我孫とよりさむしとまひきとあひうらふ奇
童とさばあむりるあうがうさよと懐よりな茶家お
かへり市之丞夫婦お見せられが嫁のよう後こび市之丞
がうれしきまことに天よりたまりる小児るべしと市良兵五
と鹿の脊よ肩きくく小児るれば鹿之助と名はけ
いけく育てまは

更科不量山賊の徒ふる話

更科ハ長阪が家来と切ぬけ象子とたげぬるや
も猿も何国へつりゆれしや音えうけまば声と限

よ呼けび谷と越え峯と攀四五里もゆりんと思
ふ頂ハくや麓の寺ぐに入相のうもむね深林いせ
うけまばこいふせん道もさき所へさきりくや暮お
はんくうらうれど象子とたげの逢ふまぜはたて虎狼
の袖うらも跡への中と自心ととげま一猶山深く
尋ゆふ宵月木の間ふの見えく鼻の声物凄く谷の
水音まんとといとあは細く足ハ茨よ撥やぶれ鮮
血くれあのもねととねしと今ハかほは気たゆも
一足もゆれねば涙とととと流し世ハ命
の人も多ううん中おわくハガどた因果る者ハ
夫之助ハ別きせ免うりたのしき我子

獣のふれ失ひ此上いづる難美とやせんうま
 い生るうらんより死るをまうと刀を取ら
 がいやく家子の生死とくとらきうり其うくのうと
 又母いへして何国へゆれば人里やあんと足任
 ぞ再びたどりたはどらまきなる夜もさや四更の
 ち路向ふ火のむら見え人声のさるすや
 ちれいやそい人家のちるさるやと心とげまじ
 来りしれが大される楠の大木わり其下ふ雪はく
 ぶれた大男も四五人火と焚くわたり居るが更科
 が来ると見え大ふ不審と汝何者なれば夜中ふる
 所へ来ると全く狐狸の類なるをうら殺し

狸汁おらんを取巻は更科手とりげまけくさやりの
 のよりらげ家ハ此山のゆりい住女らるが一子と猿ふ
 うきとれとたはゆんと道ふきまひ此所へきりし
 者よけりまきく此所お置れ夜明たむ道と教へ
 むいきとらげきまれば此者ども何り叫き合一人の男
 しみたるいそいそ心うく思とらん其等う住所ハ此
 山の上れが今宵ハそこお苗まきりて翌送てくけま
 らせんいごうと更科と中お取まれば一里むらもあけ
 と思ひいふ平らうする所へ出たり此ところよ石門ハ
 一人の男何う言入れば内よりサとこく門を開く
 入りくまきばりしれ家居のりり各一間よ入更科

とも伴ひ嘔空腹を吐きけり飯をうべと推の葉
 うめ苦ふ盛るべり人々れが更科も不審あつて其
 厚情とれし酒飯と吃しおれまがぐをす
 むへと奇麗なる夜具を出し更科と伏しめ
 が部屋ぐ入る其夜ハをとも明まが先の夜
 伴むし大男さうて首領の召あふやく出らまよ
 といふ不審あつて奥へ入る見まわれ熊の皮乃
 毛あもと着し其さぬめさるしは男二人り其所
 へ坐さる免多れ彼首領と人々と見下し汝ハ何
 国のものぞ此所ニ留せ同家寐やの伽せよとつよ
 さうし初る賊地うらふとさうりうらる億一なる詞

と出しる彼等恥しめと受けんと完尔とわらひ
 汝家とさうとや三島の口んと之れ関八州の首領より
 此さび上方へせむく序汝等小對面口んとさるる来り
 るり其さゆしと見せんと竹ふささしカさうりとぬき
 ころせば手下のものもハ夜せんうりのやうと只者さるべ
 と思ひしが扱ハとゆらけが首領天目の鬼九猿橋の鬼
 藤太かきくと打さうひさても膽のふれた女ハ汝幸
 いこ帯釵と所持せしゆ三島のおせんなど参り
 あがむくらのせし三島のおせんといふ賊首ハ釵術
 無双と聞及ぶ偽さるる手下の者どもと釵術を
 うら勝たるといつりもさうおせんかきしる人者ども

ちう人木太刀持きしれと取よせいざ手下のうち郡内此
 孫惣相手ふりさべーといふうらやまう久追取打のめ
 さんと身がまへあり更科ハ志グくと立上やいさる我
 小歌對立腰骨ふサがえとせんとうち人取よと見はしガ
 孫惣が志人くと只一うちニ打落しニツ三ツ腰骨打る
 ふうんとつら倒ま伏伊澤の鉄平鉄より黒きます
 踏まういざ参ると寄よし見えーがよハ腰ついで二三
 間投付うり吉田太良ハそれと見うあまのり行女よ
 ろうびと静し立より後抱しあうと抱やふせんせ
 りびげもらうも動うとこハかかれまよりの婦人うご
 うとりの叶ぬおそ口惜うれと惣身ふカと入てうんと

うう押々うが已がらううに余うれ七八間四つ這よ
 うのう終ふたふれうとそ見苦しうれうに手下此
 中ふ啞聾うり只うくくの言けう久人名は鳥
 動九工門うう賊よ似合ぬ実体ものおそう各の
 手もうう肩るを見く手とつううういれハ首領
 猿橋鬼藤太大ふいうり憎き片輪めが手下のもの
 肩るはうううやうる参立會人と更科ういはい汝が
 釵法実ふやうらき入り此うびの某相手とさるを
 若汝肩るうれと某が妾とされ汝打勝ハ向後首領
 と仰く此ものも家くま長く手下ふうう人う参る
 と身う人うう天目の鬼丸押をめ汝ううに山と

りとんとりや先刻より彼が容色且剣術の純き
 小心うつりも妾とるさんと知りぬ汝より先へ立合まけり
 とれハ手下とびり人何ぞ汝が花とるが先とる人と互に
 りりしむき更科ハ心ゆりく打笑ひかく懸きわら
 ハ既兩人の首領妾とるさんと宣ふこそしれしむきつざ
 一時又かきも人兩人のうら先へしむきと打伏し人小妾
 とるしむきとらひしれハ二人の首領心のうら怒り十分
 戮し憎き女の廣言かるとの美さる腰骨より折る
 らしむきと兩人三尺五寸の木太刀をさし人よりとら
 ぐい一打ふせんと眼とくどりけり更科ゆりや此兩人は
 とうり打まへるが妾とるしむきと首領とるしむき此所より

美濃守と稱ふたより又我子とまづぬるよとらもり
 りんと詞とれし君子ハ二言しりしむきハ打勝ば此山
 の首領しれしむきと兩人詞とるしむきとらとら
 首領と仰ぎしむき更科又手下より向し汝の寺も此兩
 人ハ勝つたハ妾と首領とるしむきと十五人の手下
 同に仰しやゆりしむき首領兩人まけしむき何がきて
 長く両手ふさるしむき立會やしむきとらとら
 ハ相ふかき人待りけり鬼丸鬼藤太ハ立會より以
 前ハ女の廣言しむき頬あけ今ハ意りしむきとら
 打殺し腹かんと鬼丸しむきとら打木太刀又とら
 とうりけり鬼藤太裾とらとらしむきとら兩人も名

一りよききりの火水ふなれと戦ふりりさぬ鬼荊の咲
 じりれー其の中ふ蝶の戯るさきうめりさばー勝負も
 見えざれば手下のこれどもハ只酒は酔るがごとく忙然と
 しやがらなる兩人の首領もととめのかど、何ほどの
 りりんとやいの外鈕法のさるどは電光のぶとく
 毫毛のさるれもあざれば兩人凡人みりさるるを悟り
 心ふ感トく猶も已とけしーと戦ふゆいっさのべきとい
 こんざりたる此時鬼九大喝一声しーと曳とつゝ打
 込太刀と受ががー寄とさささーが大の男を引つゝ
 ざりーと投付まば是ハサガけき鬼藤太打太刀ささる
 たる所と太刀たれにサー鬼九が上へ鬼藤太と投げけ

ちる人とりりーと打たれハ兩人ハ大カふりさる目
 らりり勝負ハ見えりゆりーとと拜さるるを見
 ぐりり其時手下の者ども一同ハ低頭平心しーと向
 後此山の首領と仰ぎたてさるんと詞をさるへ言たれば
 兩人も起上り扱ノ、君ハ凡人さるさるさる十年未
 此山の首領とたりていろくの悪漢どもとさるさるさる
 らりり終よ今日のどく見苦しに履とせばとさる
 某等兩人がさるさるさる假令唐士の呂布袁朝の公時
 朝比奈さるりとも打伏人と思ひし何ぞ計えん君乃大
 カ一打付らる既ハ冥鬼とさるんとさるさるさる
 向後幕下りりり何さるも君の下知ふ随い

勇婦全傳卷之三

と実ト小屈コカク伏フク一ヒト々ツさサ由ユりリねネハ更科モリも心ココロと
 暫チカ此コノ所トコロとトわワつツるルべベーー山ヤマ小コ住ジ女メうウねネハハ仙セ女メ
 宜ヨシなりナリとトわワいイるル夫ツレよりヨリ酒サケ肴ヤクとトのノへヘらラくクくク音ネ
 領ネのノ賀ガとトなナりリなナれレハ更科モリも心ココロと安人ヤスヒトトト思オモひヒくク世ヨ所トコロハ
 止トまマりリぬヌのノ啞ヤのノ鴉カ勘カンたタ五イ門モンハハまマたタくク仙セ女メとトもモもモいイ河カ
 りリも心ココロ小コ叶エふフやヤにニかカかカいイなナれレハ更科モリも不便フビおオけケりリ
 外ソトへヘいイくクくクはハなナりリなナれレハハ白シロまマあアりリはハ仕シへヘきキ

繪本更科草卷之三終

